OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ 遠藤保子著，『舞踊と社会-アフリカの舞踊を事例として』，文理閣，2001年1月
Author(s)	竹村，嘉晃
Citation	年報人間科学. 2002, 23-1, p. 133-138
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9024
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

遠藤保子著

『舞踊と社会 — アフリカの舞踊を事例として』

文理閣、2001年1月

竹村嘉晃

はじめに

本書は、著者の長年のフィールドワークによる資料を基にして、アフリカにおける舞踊と社会・文化とのかかわりを論じたものである。アフリカの仮面や儀礼パフォーマンスに関する人類学的研究は、これまでに大きな蓄積がある。しかし、舞踊研究者がアフリカを対象として考察するところに、本書の特色はある。

一九八〇年以降、著者は、西アフリカから東アフリカにかけての舞踊文化に関して、精力的にフィールドワークを続けてきた。アフリカをフィールドにする意義について、著者は、「文字がないかわりに舞踊や音楽が情報伝達手段として発達したといわれているように、舞踊の原初的な意味を探るうえで重要である」（本書、五九頁）と述べる。この言説には、「舞踊とは何か」という根源的な問いを背景に抱きながら、表題からも窺えるように、アフリカにおける舞踊と社会との関係性に注目する著者の視線が内在している。

本書において、著者は、舞踊人類学という領域の方法論に依拠する。本稿を進めるにあたり、評者は、舞踊人類学に関する次の二つの点に注目したい。一点目は、舞踊人類学的手法を用いて、遠藤は、アフリカの舞踊をどのように記述しているのか。二点目は、アフリカにおける舞踊と社会との関係性について、舞踊人類学的方法論によって何が明らかになったのか。これらの点に留意して、本書の内容に関して議論を進めていく。

I.

本書は、四つの章によって構成されている。第一章「舞踊と社会」において、舞踊は、社会や文化と結びついた身体表現であり、社会的機能や構造と関わるものと論じられる。そして、舞踊の核には、民族・地域・時代的要素などと不可分にかかわったひと流れの動きがあると述べる。

遠藤は、舞踊を「生産性を伴わない社会・文化に根ざしたリズミカルな動きによる人間の身体表現の総体」〔本書、一六頁〕として定義する。生産性を伴わない動作としての舞踊は、踊り方・伝承の仕方・踊る内容などから、「民族舞踊」と「芸術舞踊」の二つに分類される。前者は、宗教的・呪術的要素を内包し、自らが踊ることに意味があるのに対して、後者は、娯楽的であり、人に観せることを重視する。

続く第二章「舞踊人類学研究の国際動向」では、舞踊人類学Anthropology of Dance/Dance Anthropologyという学問領域の生成からその過程、近年の研究動向に至るまでを、人類学の研究動向と対照させながら概観している。

一九六〇年代以降、本格的に人類学の理論を学んだ舞踊研究者によって確立された舞踊人類学は、当初、非ヨーロッパ社会あるいは無文字社会における舞踊を主な研究対象としていた。しかし、近年は、かつての限定した地域の舞踊だけでなく、舞踊という研究対象自体を人類学的に考察する視点が求められている、と遠藤は指摘する。

本書の中心をなす第三章「アフリカの舞踊人類学」は、著者のこれまでのフィールドワークの成果に基づく事例研究を含んでいる。

遠藤は、アフリカの舞踊[1]を一括して論じることの難しさに触れつつも、先行研究に依拠しながらアフリカの舞踊の特性として、ポリセントリック（多中心性）とマルチプリケーション（動きの細分化）をあげる。ポリセントリックとは、手・腰・脚など身体の様々な部分に、それぞれの運動の中心点があるかのように動くことから、身体に運動の中心点が多くあるという意味での多中心性のことを意味する。一方、マルチプリケーションは、身体の部分を一定の時間内で細分化して動かすことをさす。遠藤は、アフリカの舞踊におけるこのような特性を、「舞踊が生まれた風土、生業形態、生活行動などと密接に結びついている」〔本書、五六頁〕と論じる。

次に、フィールドでの参与観察の資料を基にして、遠藤は、二つの事例研究を示す。一つは、ナイジェリア西部の都市から離れた地域で生活する、ヨルバ族Yorubaにおける伝統的舞踊の考察である。伝統的舞踊は、親から子へ、あるいは共同体の大人から子供へと伝承され、主に祭りの場で行なわれる。遠藤によれば、ヨルバ族における伝統的舞踊は、人生の重要な節目に、いわば、通過儀礼として行なわれる。そして、それらの伝統的舞踊は、踊り手の姿勢・身体の動かし方・踊られる空間において、共通した特性を持っている。

別の事例では、エチオピアの首都アディス・アベバという都市社会において、西洋式の近代的劇場において行なわれる舞踊に注目する。遠藤は、「エチオピア国民としての自覚や結束を促す『文化的な

装置』としての機能」〔本書、一一八頁〕を劇場から読み取り、本来、祭りなどの文化的文脈の中で行われる伝統的舞踊が、劇場で行なわれることによって生じる変容に着目する。そして、劇場という新しい空間において、伝統的舞踊は、観客へ効果的に見せようとする演出意図の介在によって、新しい伝統創造としての舞踊と捉えられると指摘する。それゆえ、遠藤は、祭りの場で行なわれる伝統的舞踊に対して、これらの舞踊を「伝統的」舞踊と記して区別する。

さらに、劇場において、異なる民族による様々な舞踊を観客が目にすることは、「エチオピア人としてのアイデンティティを意識させ、それぞれの民族の舞踊から民族の『文化』を可視化し、さまざまな舞踊のバラエティーをとおしてまなざしを近代的に再編すると考えられる」〔本書、一四〇頁〕と論じる。

第三章の最後では、フィールドワークによる調査成果の公表・還元についても言及する。「研究者に都合のよい一方的なフィールドワークは、アフリカ人にとって文化的な搾取と思える」〔本書、一四一頁〕と調査者としての倫理観を指摘し、遠藤自身が関わったエチオピアからの舞踊団招聘に伴う文化交流事業の成果を紹介する。

最後に、第四章「まとめと展望」では、事例研究のまとめを述べる。そして、今日の舞踊研究における舞踊人類学的考察の必要性を主張すると共に、コンピューターによる研究方法など舞踊研究の新たな側面を提示する。

事例研究のまとめとして、遠藤は、二つの事例における舞踊の共通する点を四つあげる。第一に、舞踊は、音楽と一緒に踊られる。第二に舞踊は、人と人、あるいは人と超自然（神）とのコミュニケーションに欠かすことは出来ない。第三に、舞踊の特性は、その地域の地理・宗教・生業形態などが反映される。第四に、舞踊は、「劇場的」空間と深く関わっていると遠藤は結論づけている。

II.

本書は、舞踊研究において、これまで十分に報告されることがなかったアフリカの舞踊を、実際のフィールドワークに基づいて考察した、という点において評価される。では、その他に、舞踊研究の視点から本書を捉えるならば、どのような点が指摘できるであろうか。ここでは、本書を批判的に検証し、問題点を指摘する。

舞踊研究は、主に舞踊の動きや型の分析と、歴史・伝播やそれに関する分類などの分析に大別することができる。それゆえ、儀礼や祭りなどの文化的実践における舞踊を論じる際に、これまでの舞踊研究は、本来の文化的コンテクストから舞踊だけを抽出して、文脈と関連づけることなく、その動きや型だけを分析する傾向にあった。

一方、舞踊と社会とのかかわりに注目する遠藤は、本書において、事例対象であるヨルバ族に関する社会構造や日常生活などについて言及する。そして、それらを前提にして、祭りというコンテクストの中で、ヨルバの人々と舞踊のかかわりを考察する。たとえば、舞踊カレンダーを示して、年中行事の中に見られる祭りと舞踊の関係性を論じたり、あるいは祭り全体の記述に加えて、祭りにおける舞踊と音楽との関係などを説明する。このように、ヨルバ社会におい

て、文化的実践として行なわれる舞踊を、祭りという文脈の中で捉えようとする遠藤の立場は、評価に値する。

反面、本書は、ナイジェリアとエチオピアの二つの事例を基に、アフリカの舞踊の特性を一括して述べている点で批判の対象となる。二つの事例から、安易にポリセントリック（多中心性）とマルチプリケーション（動きの細分化）という要素を、アフリカの舞踊の特性として普遍化することは避けるべきである。

それよりもむしろ、本書のより大きな問題は、遠藤の説明のなかに、詳細な分析を伴わず、根拠を見出すことが困難な見解が見られる点である。たとえば、遠藤は、舞踊が「社会や文化と結びついた身体の表現であり、それは社会的機能や構造とかかわっている」〔本書、一六頁〕と指摘する。あるいは、アフリカの舞踊の特性に関していえば、「舞踊が生まれた風土、生業形態、生活行動などと密接に結びついている」〔本書、五六頁〕と論じる。しかしながら、これらの説明の根拠となる具体的な議論や事例は、本書の中から見出すことは出来ない。

すなわち、本書は、アフリカの事例から、舞踊と社会とのかかわりを論じることを目的としているにも関わらず、その主題に関する議論は、不十分といわざる得ない。さらにいえば、その主題を検討する上で、明かに不足している要素とは、対象地域の人々の視線や言葉にもとづいた「彼らの語り」である。詳細な分析を伴わず説得力を欠いた遠藤の説明に必要なものとは、まさしく「語りを含めた彼らの視点」であり、その視点に内在するものの分析である。

実際のフィールドワークに基づいて、アフリカの舞踊を記述した本書は、言いかえれば、「アフリカの舞踊の民族誌」を描く試みともいえる。そこで、「舞踊の民族誌」という観点から本書を捉え、舞踊の記述方法と現地の人々の「語りを含めた彼らの視点」という二つの問題について、次に検討したい。

III.

舞踊研究は、「いかに舞踊を記述するか」という問題を常に抱えている。それは、舞踊を記述する際に、動きをどのように捉えるかという問題を含んでいる。言語を媒介とせず、身体から身体へと伝承される舞踊の本来的な意味や印象的な動きを、実践される空間や時間などの文脈から切り離して、いかに特定の言葉で表現することができるだろうか。

今日、最もよく知られた舞踊の記述方法は、ルドルフ・ラバンRudolf Labanによって考案され、ラバノーテーションLabanotationと称される舞踊記譜法である。これは、人間の運動を空間と時間のなかで記述する譜法といえる。ラバノーテーションは、動き自体の記譜を行なうものであるため、理論上、あらゆる文化における舞踊の記譜が可能である。反面、文化的コンテクストを考慮に入れないゆえ、しばしば批判されることもある。

舞踊研究において、参与観察による分析は重要である。しかしながら、これまでの参与観察による舞踊の記述の多くは、舞踊自体の動きや構造の分析に終始する傾向がある。それゆえ、そこで描き出

される舞踊とは、観察者であるわれわれ第三者に映る舞踊であって、現地の人々の「語りを含めた彼らの視点」は、含まれていない。

本書に関していえば、遠藤の記述は、観察者である遠藤自身に映ったアフリカの舞踊における動きの分析であり、遠藤から見る舞踊と社会のつながりについてである。それゆえ、アフリカの人々の「語りを含めた彼らの視点」は、欠落している。

舞踊を実践する者は、身体を用いて表現する律動的動作から、どのような世界を感得しているのだろうか。一方、人々は、舞踊の実践を観ることで、どのような世界を感受しているのだろうか。さらに舞踊は実践される社会・文化・世界観の中で、どのような位相にあるのであろうか。

これらの問題を検討するためにも、今後の舞踊研究は、舞踊の動きや構造の分析に加えて、対象となる人々の「語りを含めた彼らの視点」を考察するべきである。そして、舞踊という限定的な現象よりはむしろ、それを生み出す実体としての身体を中心に捉え、われわれをとりまく社会や文化、さらには世界観を探ることこそ、舞踊研究が抱える課題ではないだろうかと評者は考える。

このような問題意識のもとで舞踊を記述するならば、必然的に「彼ら」の身体、あるいは身体観などが注目される。もちろん、その身体観とは、「語りを含めた彼らの視点」に基づくものである。

これまで人類学が身体に関する議論を深めてきた一方で、舞踊研究は、舞踊の実践者自身の身体観に関して、十分に議論していない。それは、舞踊の動きや構造の分析に固執したためであり、実践者の身体に対する客観的な記述はあっても、主観的な「語り」はない。

本書で示された舞踊人類学とは、人間の身体の動態に着目し、それをとりまく世界とどのように関連するかを考察する学問である。すなわち、日常の動作や儀礼などの文化的実践における身体の動態、あるいは舞踊を実践すること自体によって、社会・文化全体の中で、どのような繋がりをもっているかを検証する領域といえる。

それゆえ、舞踊の動きや構造の分析に加え、当該地域の「語りを含めた彼らの視点」も必要不可欠なのである。そして、「語りを含めた彼らの視点」による身体観を土台に、舞踊を社会的・文化的脈絡の中で描くことこそ、「舞踊の民族誌」といえるのではないだろうか。それは、舞踊という文化現象を通じて、社会文化の構造を探求する行為でもある。

おわりに

今日、舞踊研究者に加えて、民族音楽学者や人類学者の多大な貢献により、世界各国の諸民族に伝承されている舞踊に関して、数多くの調査が報告されている。それらの資料をもとに、舞踊研究では、舞踊の社会的機能や構造、あるいは文化的パターンなどに関する分析が行なわれ始めている。

それゆえ、これからの舞踊研究は、ある特定の民族における身体動態に関する分析だけでなく、「語りを含む彼らの視点」を検証し、身体動態をとりまく世界とどのような関わりを持つのかを検討しなければならない。舞踊人類学とは、まさにその方向性を示す学問領

域なのである。

評者は、これまでの舞踊研究において、十全に捉えることが出来なかったシャーマンなどの宗教的職能者における身体動態を考察する上で、舞踊人類学の方法論は、新たな観点を示唆するものであると考える。宗教的実践者の身体動態の分析は、舞踊という枠組みに囚われた限定的な視点によるのではなく、身体を中心に実践者をとりまく社会や文化、さらには世界観などからも考察する必要がある。

本書は、舞踊研究者に対して、研究視点や方法論を反省させるだけでなく、今日の舞踊研究が抱える問題を再認識させるものである。

注

(1) 遠藤は、アフリカの舞踊とは、サハラ砂漠以南のブラック・アフリカの舞踊を指すことが一般的であると述べる。それは、音楽の分野おいて、ギニア湾岸から中南部に広がる地域をアフリカ的音楽文化地域として求めているからであり、同地域で踊られる舞踊を中心に考察すると遠藤は説明する〔本書、五五頁〕。